

248. 滋賀県甲賀郡水口町 泉古窯採集遺物の検討(後編) —古墳時代須恵器の地域色の発現について—

4. 短脚高杯からの検討

ここでは短脚高杯の脚部の形態からみた系譜関係と、そこからみた流通圏の問題について検討を試みたい。

出土した短脚高杯の脚部の形状は、図示しているように計22点の内下方に屈曲し稜を有する端部を持つものをⅠ類に、ほぼ水平に接地する凹面を成す端部を持つものをⅡ類としたが、Ⅰ類が10点、Ⅱ類が12点というようにⅡ類が若干多い。これを時間的な前後関係に直接的に結び付けて考えるのではなく、系統差として捉えるならば、少なくとも2系統が存在していたこととなろう。更に(中編)⁽³⁾において第6図に概念的に提示した「高杯の分類」の様に必ずしも系統的に考える必要はなく、最大限に細分化した結果、8系統の個体群が抽出できるのである。つまり、泉古窯という特定の「場」を仲立ちに、操業期間という限られた「時間



泉古窯とその周辺古墳

の中で8系統の短脚高杯が作られていたと考えてよい。ただこれら8系統のバリエーションは泉古窯にしか存在しないという固有のものはない。むしろ、当該期の生産地の中で最大規模を持つ和泉陶邑古窯址群においてバリエーションを確認することが出来るものである。和泉陶邑古窯址群の中の地区別でいうと、ここで分類した脚端部の形状のⅠ類とⅡ類が共存する在り方を示すのは、大野池(ON)地区と光明池(KM)地区の近接する窯に多く⁽⁴⁾、高蔵(TK)地区や陶器山(MT)地区といった北地区と称される地区には長方形透かしが卓越する傾向⁽⁵⁾があるという。この点から、和泉陶邑古窯址群の中では前者との関連性を指摘することが出来るだろう。

次いで短脚高杯から見た流通圏の問題についてふれてみたい。短脚高杯の脚端部の形状は前述したように泉古窯固有のものは存在しない。しかし、その中で特徴的なものが、ほぼ水平に接地する凹面を成す端部を持つ脚部に、菱形の透かしを持つものとしたB-IIb類である。この一群は泉古窯においては数量的には全体の約3分の1にあたることから主体を成すものであるが、他の窯跡においては一定量の出土をみないことから、胎土や発色などの点を併せると産地同定を行うことが他の器種に比べて容易である。この点を活かして泉古窯の所在する滋賀県地域の資料を検索してみよう。

実は、長々と検索の方法を記したにもかかわらず、滋賀県地域出土資料には、間違いなく泉古窯の製品であると判断できるもの(B-IIb類)は見当たらなかったのである。他の形態のもので、泉古窯の製品であると判断(想定)出来たものは湖南地域に若干量見られるのみで、しかも出土する遺跡の中ではその製品自体は客体としての量でしかない。つまり、現状の資料の検索からは泉古窯の製品は時間的にも空間的にもさほど安定性を持たなかったといえそうである。

5. 古墳時代須恵器の地域色の発現について

古墳時代須恵器の地域色の発現について泉古窯の資料を元に検討を加えたい。

泉古窯の出土遺物の一つの特徴はB-IIb類とした高杯が比較的多く存在するという点にある。しかし、前述したように遺物の空間的な広がり(流通圏)はさほど大きくないこと、かつ、時間的にも限定されてい

る可能性が高いことが理解できた。この現象を以って地域色の発現とすることができるのであろうか。確かにその地域に特徴的な遺物を「地域性」という理解で捉えることは不可能ではない。中でも教習されたはずの地域の技法や製品の特徴、或いは組成を少しでも逸脱した時点で「地域色」が発現されたと考えるのは全く不可能なことではないこととなる。

菱田哲郎氏によると「地方窯の成立にあたっては、当初は陶邑窯に似た製品が作られたものの、次第に独自の変化を遂げているという現象を把握」⁽⁶⁾出来るとする興味深い指摘がある。この指摘は技術が一度導入された時点で、再生産が全て地元で行なわれるようになるという理解の上に成り立つものである。しかし、日本列島各地域の須恵器編年の大枠は、ここで問題とする6世紀代を中心とした時期においては、基本的に中村浩氏や田辺昭三氏の提示した和泉陶邑古窯址群編年に依拠する形でその時間的前後関係が設定されているが、さほど大きな矛盾は無い様に見受けられる。つまり、多少の併行関係の差はあるとしても（主として法量から見た）形態変遷モデル自体はほぼ同一のものとして捉えて差し支えない⁽⁷⁾。つまり、菱田哲郎氏が指摘するような地域的な差異は存在するものの、「独自の展開」を見せるはずの「地方窯」が何れも同一歩調で変化を見せるという点は何を意味するのであろうか。

現状の資料をみる限り、(現状の研究で)「地域色」を発現する(と考えられている)須恵器の存在を強調する限りにおいては須恵器製作にかかる再生産のレベル自体はさほど低いものではない様に見える。しかし、6世紀を中心とする時期に日本列島の須恵器の広域編年が大きな矛盾なく成立している現状をみる限りにおいては広範囲にわたる技術や形態(モチーフ)情報の同一性(若しくは類似性)を認めることが出来るのである。つまり、全体の傾向としては、日本列島規模の広範囲にわたる情報共有圏が存在していることを認めざるを得ない。現在の研究で「地域色」と称されるものは、消費者側からの要請に基づく「個性豊か」な器形を作り出したものであると捉えるのが妥当ではないだろうか。

更に、地域色の発現を説く上で論拠とするものが、和泉陶邑古窯址群の資料を用いて一連で捉える編年観で以って、本来共存しても何等問題のない土器群を「型式」的に分断する点⁽⁸⁾には問題はないだろうか。加えて、編年案自体は提示されてはいるものの実態のはっきりしない和泉陶邑古窯址群の資料をすべての定点に置くという立場についてもやはり問題が無いとはいえないのではないだろうか。

つまり、従來說かれていた須恵器の地域色の発現形態についての議論は果たして有効なものであったかと

いう点(特に方法論の問題)が指摘できるのである。地域色を見出してそこから生産編成などに切り込んで行こうとする方向性については何等問題が無く、研究の視点としては有用なものであると考えるが、今後は方法論的な成熟が求められるのではないだろうか。

6. まとめにかえて

以上に、甲賀郡水口町泉古窯採集遺物の検討を通して、生産の相対的な時間幅、技術的な関係、製品の流通圏の問題についてふれてみた。しかし、検討の対象としたのが採集遺物であったということから資料操作に関しては限定的なものがあつたことはいまでもない。とはいえ、「2・泉古窯とその周辺環境」でふれた6世紀代に散発的な生産状況を呈する生産地の様相について、より具体的なアプローチを試みる事が出来たと考えている。以上の成果を踏まえて今後の課題についてふれておきたい。

6世紀代において散発的な生産状況を呈するものの一例として甲賀郡水口町泉古窯の検討を行ったが、対極にあるといえる継続した生産を続ける野洲郡野洲町・蒲生郡竜王町鏡山古窯址群の検討が残されている。ただ、鏡山古窯址群については著名な窯址群であるにも関わらず発掘調査例が殆どなく良好な資料が蓄積されているとはいえない。また、鏡山古窯址群と総称しているが、分布の傾向から野洲町側の北西麓古窯址群と北東麓古窯址群に分けられているが、窯跡の分布の傾向が製品にどの様に反映しているのかについての研究は未だ見られない。ほぼ旧国単位で1カ所程度見られる拠点的な須恵器生産地の問題についても今後ふれていかなければ須恵器生産史の上で対極にある泉古窯の評価を下すことは出来ないのである。

(畑中 英二)

註

- (3)畑中英二 「237.滋賀県甲賀郡水口町泉古窯採集遺物の検討(中編)―古墳時代須恵器の地域色の発現について―」(『滋賀文化財だより』No217 財団法人滋賀県文化財保護協会 1995)
- (4)中村浩 「遺跡の立地と環境」(『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978)
- (5)野上丈助 『陶邑Ⅴ』大阪府教育委員会 1980
- (6)菱田哲郎 「須恵器生産の拡散と工人の動向」(『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会 1992)
- (7)畑中英二 「滋賀県湖南地域における須恵器杯Hの時間軸上の位置付けについて―古墳時代須恵器の地域色の発現について―」(『大通寺古墳群』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1995)
- (8)前掲註(6)

249. 甲良町谷田古墳出土遺物の紹介

今回ここで紹介する資料は、甲良町大字池寺字谷田に位置する谷田古墳と称される古墳から出土している須恵器・金属製品についてである。この谷田古墳は、現在の名神高速道路甲良パーキングエリア周辺が字谷田にあたることから、その中に認められる寺道古墳群の中の一基であると考えられる。この寺道古墳群は、横穴式石室を内部主体とする円墳10基以上からなる古墳群であるということが確認されている。したがって谷田古墳も、不時発見によって確認された可能性が高く、石室及び遺物の出土位置などといった詳細なデータはなく不明であるが、横穴式石室を内部主体とする円墳であった可能性が高い。

1. 須恵器

当古墳の須恵器は、杯蓋3点・杯身2点・有蓋高杯の蓋5点・有蓋高杯4点・無蓋高杯1点・甌2点・埴瓶1点・短頸壺1点・壺脚部1点・壺蓋1点の計21点である。

なお、その他のデータは表1にまとめてあるのでこちらを参考にされたい。

では、これらの須恵器についての観察所見についてふれてみたい。

これらの須恵器は、概ね6世紀後半のものであると考えられるのだが、セット関係や形態的な特徴からはこれらの一群の中に時間軸上の差が存在するのかどうか、つまり追葬がなされているのかどうかということ判断するのは困難である。

しかしながらこの一群には、焼成及び発色の違いによっては大きくグループ分けすることが可能である。

ひとつは有蓋高杯の蓋7～10までと高杯11～14までのグループであり、もうひとつはそれ以外のグループである。前者は、セット関係をなすものであると思わ

れるが、焼成が不良で発色が灰白色をしているという属性を持つグループである。そして、このグループには10の蓋に認められるようにつまみの部分が焼成前から欠損したような粗悪な製品が含まれるなど先の属性と合わせて、製品としてはあまり完成度の高くない製品の一群であると考えられるグループであり、全体の約38%を占めるものである（Aグループ）。

一方、後者のグループは、6・15・21の極めて焼成がよく暗青灰色を発色するものも含めて、焼成がよく青灰色を発色する属性を持ったグループとして捉えることができる。このグループは、全体の約62%をしめるものである（Bグループ）。

このようにこの一群の須恵器には、品質差が存在するような状況が認められる。

もちろん、このような品質差が生じるには、①供給先の差、②時間的な差、③同一窯内における焼成位置での差などのさまざまなケースが考えられるが、現段階では特定するだけの資料は持ち得ていない。

仮にAグループとBグループが示すとみられる差が時間軸上の前後関係を示すものであるとすれば、初葬・追葬は問うことはできなくとも、質の低いものとみられるAグループのような須恵器を多く副葬した段階があったと判断できるものと思われる。

また、同一窯から供給されると考えられる範囲内において、同時期の古墳群及び各古墳に副葬されている須恵器の様相を捕らえることによって、この差が品質差を示すものであるとした場合、それぞれの古墳群及び古墳に格差を認めることができれば、時間的にまた空間的に各古墳群及び古墳の差つまりそれぞれの個性について言及することができる可能性があるものと考えられている。

最後に、このような各古墳群の副葬品の品質差を見出すことによって、その地域に古墳群として認識できる各グループが作り出していた地域社会を知ることができる可能性もあると思われる。

近年、谷田古墳の近隣に所在する北落古墳群、塚原古墳群などの調査例が増大している。今後は、これらの資料ともあわせて、谷田古墳の位置する犬上左岸という地域社会の様相把握に務めたい。

(中村 智孝)

2. 金属製品

当古墳の金属製品には次のようなものがある。

・銀環1対(図2-1・2)

八角形に面取りした銀製棒を丸く曲げ仕上げている。側面に2種類の工具状の痕跡が見られる。すなわち、①側面3方向に縦方向につくもの、②側面1面にのみ小孔がつくものである。

1には痕跡①が開き部近くに1対、痕跡②が開き部



図1 谷田古墳(寺道古墳群)位置図

と開き部の反対側にそれぞれ1対ずつつく。2には痕跡①のみが開き部近くに1対つく。銀環を曲げる際のペンチ状の工具の使用が考えられる。

・鉄刀

図化していないが錆に覆われ膨れた状態である。透かしを持つ倒卵形の鍔金具が伴う。

・鉄鏃 (図2-3)

柳葉式鉄鏃である。図化したもののほかに鏃身の先の破片が1点ある。これも柳葉式と思われる。

・鉄製刀子 (図2-4)

身がやや内反りを呈す。

・鉄斧 (図2-5)

肩部に張り出し部を持たないタイプの有袋鉄斧である。錆化が進み脆弱な状態である。

・馬具 (図2-6)

兵庫鎖立間素環鏡板付轡である。引手金具、素環部、銜金具は錆着している。

以上8点の金属製品の出土が知られている。

(山中由紀子)

| | 器形 | 口径 | 器高 | 焼成 | 色調 | 流砂方向 |
|----|-----|------|------|----|------|-------|
| 1 | 杯蓋 | 14.5 | 4.8 | 良好 | 青灰色 | 時計回り |
| 2 | 杯蓋 | 14.6 | 5.1 | 良好 | 青灰色 | 時計回り |
| 3 | 杯蓋 | 15.8 | 4.8 | 良好 | 青灰色 | 時計回り |
| 4 | 杯身 | 12.4 | 5.4 | 良好 | 青灰色 | 時計回り |
| 5 | 杯身 | 12.7 | 4.8 | 良好 | 青灰色 | 時計回り |
| 6 | 高杯蓋 | 14.4 | 5.3 | 良好 | 暗青灰色 | 反時計回り |
| 7 | 高杯蓋 | 14.9 | 5.0 | 不良 | 灰白色 | 反時計回り |
| 8 | 高杯蓋 | 15.3 | 5.0 | 不良 | 灰白色 | 反時計回り |
| 9 | 高杯蓋 | 15.4 | 5.2 | 不良 | 灰白色 | (反時計) |
| 10 | 高杯蓋 | 15.4 | 4.8 | 不良 | 灰白色 | 反時計回り |
| 11 | 高杯 | 13.0 | 4.2 | 不良 | 灰白色 | 時計回り |
| 12 | 高杯 | 14.0 | 4.8 | 不良 | 灰白色 | 時計回り |
| 13 | 高杯 | 13.4 | 4.9 | 不良 | 灰白色 | 時計回り |
| 14 | 高杯 | 13.4 | 4.5 | 不良 | 灰白色 | 時計回り |
| 15 | 高杯 | 10.0 | — | 良好 | 暗青灰色 | 反時計回り |
| 16 | 碗 | 12.8 | 15.7 | 良好 | 青灰色 | — |
| 17 | 碗 | — | — | 良好 | 青灰色 | — |
| 18 | 堤瓶 | 6.8 | 22.2 | 良好 | 青灰色 | — |
| 19 | 短頸壺 | 11.0 | 15.6 | 良好 | 青灰色 | — |
| 20 | 壺脚 | — | — | 良好 | 青灰色 | — |
| 21 | 壺蓋 | 9.8 | 4.0 | 良好 | 暗青灰色 | — |

表1 土器観察表 (単位はcm)

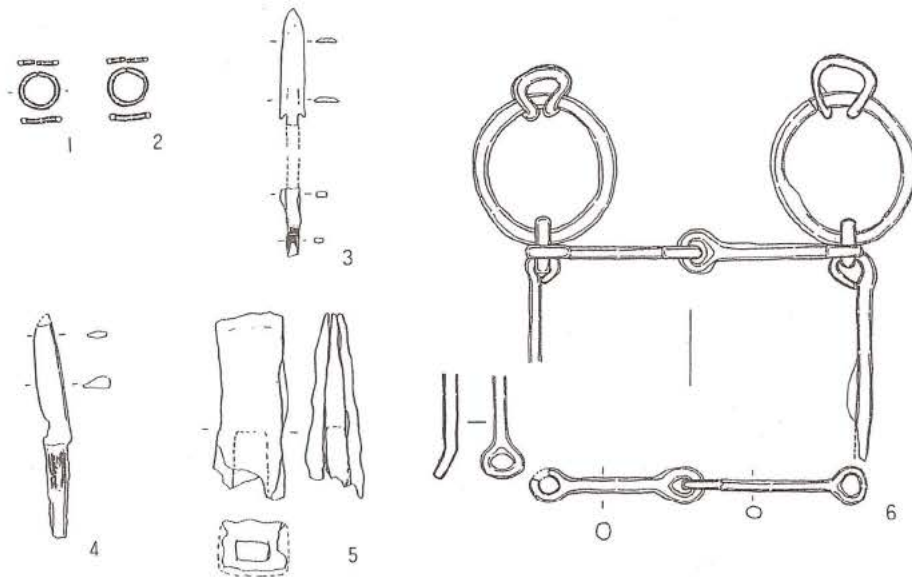


図2 金属製品実測図(S=1/6)

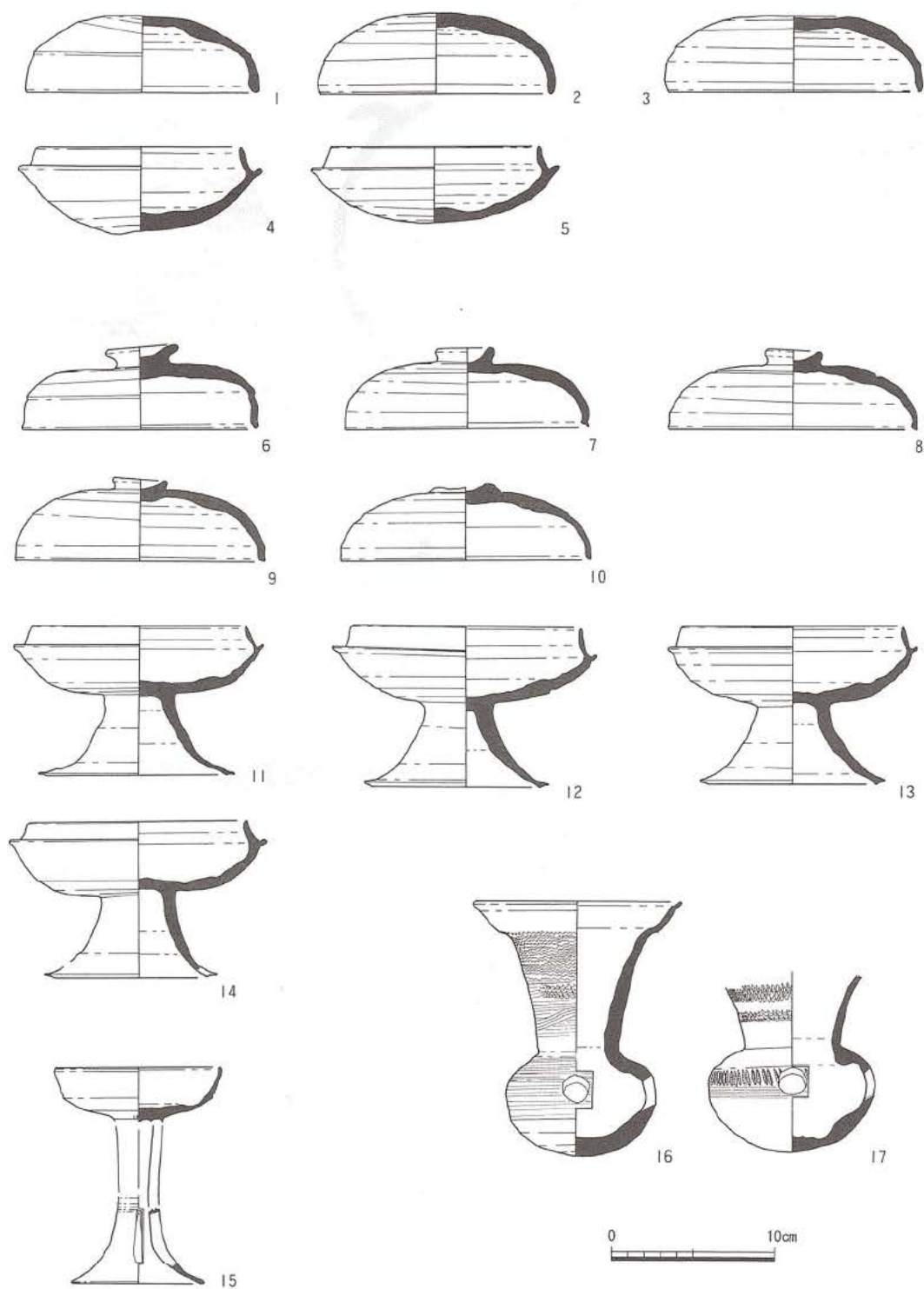


图3 須恵器実測図1

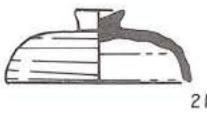
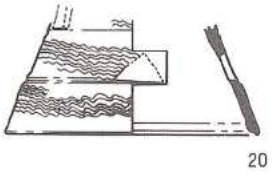
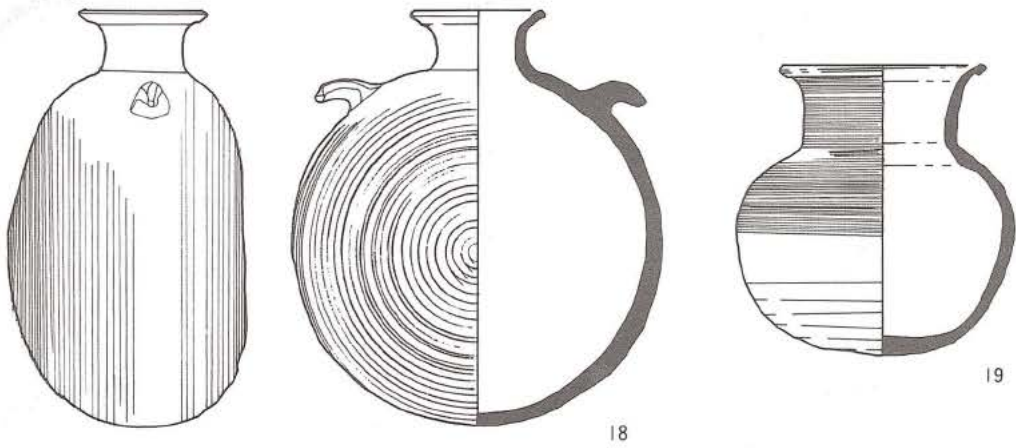
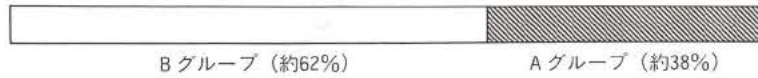


図4 須恵器実測図2

・各グループの割合



・器高/口径分布表

